TÉRRA CLUB
てら子屋だより

『TÉRRA CLUB てら子屋だより』は、
てら子屋のプログラム「てら子屋ワークショップ」を中心に、
その臨場感をそのままに映しこんで作った、
コミュニケーションメディアです。
てら子屋メンバー家族の方々の声、表情が、
とてもよく伝わってきます。

① 第１回てら子屋コンサート
「地球の反対側から音が来る！」

② 第１回てら子屋ワークショップ
「風の谷を冒険しよう　―森には何があるのだろう―」

③ 第２回てら子屋ワークショップ
「音をつくろう　―森の材料で楽器をつくろう―」

④ 第３回てら子屋ワークショップ
「木でつくろう　―森には遊びの材料がたっぷり―」

⑤ 第４回てら子屋ワークショップ
「土でつくろう　―縄文時代の器をつくろう―」

⑥ 第５回てら子屋ワークショップ
「火でつくろう　―原始時代でパーティーしよう―」

★ てら子屋コンサート

★ 参加者のコメント

editor ／ Naoko Fujimura　photographs ／ Atsushi Kojima

緑の木立と肌に感じる優しい風。アンデスのメロディーが風の谷にこだました。

たった2人の演奏とは思えないほど、迫力のある演奏だった。できるだけ、シンプルに、そして昔の音に近い演奏をするのが、ロス・アウキスの特徴だ。素朴な竹や木でできた楽器は、相当の肺活量を必要とする。

5月29日、金曜日。朝から降り続いていた雨も上がり、ほんの少しひんやりとした風が吹きはじめた。

どこからともなく漂ってくる蚊取り線香の匂い。虫除けのたいまつの明りが、誰もいないステージにほの暗い影を落している。

ぬかるんだ道を、人々が風の谷目指して集まってきた。ざわざわとステージ奥の木立が揺れる。からすの鳴き声が、谷にこだまする。

急坂を息せき切って登ってきた近所の人たち。子どもたち。夕方の世田谷通りの渋滞をはるばる抜けてやってきた人たち。それぞれが思い思いの場所でほっと一息ついたころ、コンサートは始まった。

「てら子屋コンサート」の1回目を飾ったのは、地球の裏側、はるかペルーからやってきたフォルクローレのグループ、ロス・アウキスの2人組。太鼓やギター、そして首からなん種類もの木の笛を下げての登場だ。いったい何が始まるのだろう？　アンデスの音楽ってどんなのなんだろう？　子どもも大人もそんな期待感と好奇心でいっぱいだ。

素朴な笛の音と心地よいリズムで1曲目が始まった。覚えやすく、どこかで聞いたことがあるような懐かしい感じのする曲に、思わず顔がほころんでしまう。2曲目は、一転、物悲しく、美しい旋律。心にシーンと染みいってくる。しかもこのロケーション。ひたひたと押し寄せてくる夕暮れ。湿った空気。ライトに集まりはじめた虫たちの羽音。どんどん雰囲気は盛り上がってくる。なんだか、いい感じ。ここが幼稚園だということを忘れてしまいそうになる。アンデスのメロディーに、自然と心と身体がなじんでいくのが良くわかる。

インカの時代から使われていたという楽器の数々。人々の生活の中に深く関わってきたというその音楽。何度となく繰り返されてきた迫害の歴史の中で、歌いつがれてきたこの旋律を、今、ここで、この風の谷で聞いているという、そのめぐりあわせはちょっぴり感動的ですらある。

ステージ正面にある滑り台上の特等席で、身体を揺らしながら聞く子どもたちの心にも、はじめは身構えていた大人たちの心にも、なにかしら同じ思いがきっと横切ったにちがいない、そんな気がした。

4曲目が終わったところで、楽器の紹介だ。ケーナ、サンポーニャ、バジョデリュピア…、舌をかみそうな聞き慣れない名前の楽器ばかりだが、子どもたちは興味津々。それらの楽器が、竹や葦やサボテンでできていること、形の面白さや、音色の違いに身を乗り出さんばかりだ。リーダーのセルヒオがケーナで「花」を吹きはじめた。「はーるのーうらーらーのーすーみーだーがーわー」なんて暖かく優しくひびくんだろう。そして、地球の裏側の楽器がこんなにも日本的な音色をもっているということが、とても不思議に思えた。

1部最後の曲は「コンドルは飛んでいく」だった。が、私は今までこんな「コンドルは飛んでいく」を聞いたことがなかった。この曲がこんなにすてきな曲だったなんて知らなかった。ゆったりと大らかなケーナのひびき。それは、どこまでも果てしなく広がるアンデスの空の青さに吸い込まれていくかのようだ。白く険しい山嶺。その間を縫うように、大きな翼を広げ、自由に、ゆっくりと漂うコンドルの姿。行ったこともないその地の風景が目に浮かんでくるほど、ロス・アウキスの演奏は情感に満ちた素晴しいものだった。この曲に込められた、人々の思いや、憧れが、熱く心にひびいてくるようだった。

さて、10分の休憩後、第2部はとても原始的な雰囲気の曲からスタートだ。ステージ奥の木々は、すっかり黒いシルエットになっている。風も出てきた。梢が揺れる。

1 TÉRRA CLUB REPORT レポート

タルカという縦笛は、まるで狼の遠吠えのように聞こえる。娘が、ちょっと不安気に手を握ってきた。チャッチャッとリズムを刻むのは、その名も「チャッチャッ」という楽器だ。羊の爪をたくさんつなげて作ってあるという。

踊り出したくなるような楽しい曲が始まった。会場も手拍子で盛り上がってくる。「あれ、この曲知ってる」と、誰もがそんな顔をしたのは、「花祭り」という曲だ。意外にもアンデスのメロディーは、私たちの身近にあったというわけだ。楽しいとか素敵だなとか感じる心に、子どもも大人も、日本人も外国人も、違いはないんだってこと。それよりも、同じ曲で一つになれるってことへの幸せみたいなものを、確かにこの一瞬、共有できたのではないだろうか。

アンコールは風の谷幼稚園の先生を中心に、輪になってのダンスが始まった。3人が5人に、5人が10人、20人とおじいちゃんもおばあちゃんも加わっての輪ができる。ぐるぐると楽しい輪。手拍子にも一層力がこもって、スピードも増して。

予定時間を大きく超えて、コンサートは終わった。

もっとインフォメーションをして、たくさんの人に聞いてもらいたいほどそれは素晴しいコンサートだった。でも、踊りの輪が少しずつ大きくなっていったように、今夜のこの体験や思いが、この風の谷に集まった人たちを通じて、少しずつ広がっていけばいいなぁ、と思えるようなコンサートだったと。

心がじんわりあったかくなって、なんだかよかったよね、て誰かに言いたくなるような、そんな思いを胸に、すっぽりと闇に沈んだ幼稚園をあとにした。

Los Awkis
ロス・アウキス

ロス・アウキスは、1988年、アンデスの高峰に囲まれた海抜3326mの高地にある、ペルー、クスコ市で結成されたグループです。その地で生まれたリーダーのセルヒオは、ケチュア語を話す家庭で、祖父の吹くケーナを聞きながら育ちました。植民地支配の影響で、インカ帝国の公用語であったケチュア語を話すことや、伝承曲を演奏することは、当時でさえ蔑視されたといいますが、セルヒオは祖父の吹くケーナの音色に心を奪われ、やがて自らも演奏に熱中するようになりました。ペルーでも西洋音楽は流行し、もてはやされていますが、そんな中で、ロス・アウキスは、アンデスに伝わる民族楽器を使い、ペルー、ボリビア、エクアドルなど、アンデス山系に伝わる情緒豊かな民族音楽を演奏し続けてきたのです。アンデスに生きて来た人々の、心や伝統を、祖先の残した素晴しい財産を、次の世代に伝えようとしているのです。

楽器紹介

*ケーナ（quena） インカ帝国以前から伝わっていると推定されている、葦または竹で作られた縦笛。動物や人間の骨で作られたものも発掘されている。

*サンポーニャ（zanpona） 竹や葦の管を、長さの順に並べて結え付け、音階を吹けるようにした笛。普通は2列に重ねる。手のひらに乗るものから、人の背丈ほどあるものまである。

*タルカ（tharka） 四角い木でできている縦笛。吹き口は、リコーダーによく似ている。この楽器は、チチカカ湖に住んでいるアイマラ族が使用する。

*ワンカラ（wanqara） 子山羊の毛皮を張った平形の大太鼓。

その他、ピンクーヨ（縦笛）、パジョテリュピア（レインスティック）、ボンボ（大太鼓）、ギター、バイオリンなどたくさんの楽器を演奏する。

緑の木立と肌に感じる優しい風。アンデスのメロディーが風の谷にこだました。

たった２人の演奏とは思えないほど、迫力のある演奏だった。できるだけ、シンプルに、そして昔の音に近い演奏をするのが、ロス・アウキスの特徴だ。素朴な竹や木でできた楽器は、相当の肺活量を必要とする。

5月29日、金曜日。朝から降り続いていた雨も上がり、ほんの少しひんやりとした風が吹きはじめた。

どこからともなく漂ってくる蚊取り線香の匂い。虫除けのたいまつの明りが、誰もいないステージにほの暗い影を落している。

ぬかるんだ道を、人々が風の谷目指して集まってきた。ざわざわとステージ奥の木立が揺れる。からすの鳴き声が、谷にこだまする。

急坂を息せき切って登ってきた近所の人たち。子どもたち。夕方の世田谷通りの渋滞をはるばる抜けてやってきた人たち。それぞれが思い思いの場所でほっと一息ついたころ、コンサートは始まった。

「てら子屋コンサート」の1回目を飾ったのは、地球の裏側、はるかペルーからやってきたフォルクローレのグループ、ロス・アウキスの2人組。太鼓やギター、そして首からなん種類もの木の笛を下げての登場だ。いったい何が始まるのだろう？　アンデスの音楽ってどんなのなんだろう？　子どもも大人もそんな期待感と好奇心でいっぱいだ。

素朴な笛の音と心地よいリズムで1曲目が始まった。覚えやすく、どこかで聞いたことがあるような懐かしい感じのする曲に、思わず顔がほころんでしまう。2曲目は、一転、物悲しく、美しい旋律。心にシーンと染みいってくる。しかもこのロケーション。ひたひたと押し寄せてくる夕暮れ。湿った空気。ライトに集まりはじめた虫たちの羽音。どんどん雰囲気は盛り上がってくる。なんだか、いい感じ。ここが幼稚園だということを忘れてしまいそうになる。アンデスのメロディーに、自然と心と身体がなじんでいくのが良くわかる。

インカの時代から使われていたという楽器の数々。人々の生活の中に深く関わってきたというその音楽。何度となく繰り返されてきた迫害の歴史の中で、歌いつがれてきたこの旋律を、今、ここで、この風の谷で聞いているという、そのめぐりあわせはちょっぴり感動的ですらある。

ステージ正面にある滑り台上の特等席で、身体を揺らしながら聞く子どもたちの心にも、はじめは身構えていた大人たちの心にも、なにかしら同じ思いがきっと横切ったにちがいない、そんな気がした。

4曲目が終わったところで、楽器の紹介だ。ケーナ、サンポーニャ、パジョデリュビア…、舌をかみそうな聞き慣れない名前の楽器ばかりだが、子どもたちは興味津々。それらの楽器が、竹や葦やサボテンでできていること、形の面白さや、音色の違いに身を乗り出さんばかりだ。リーダーのセルヒオがケーナで「花」を吹きはじめた。「はーるのーうらーらーのーすーみーだーがーわー」　なんて暖かく優しくひびくんだろう。そして、地球の裏側の楽器がこんなにも日本的な音色をもっているということが、とても不思議に思えた。

1部最後の曲は「コンドルは飛んでいく」だった。が、私は今までこんな「コンドルは飛んでいく」を聞いたことがなかった。この曲がこんなにすてきな曲だったなんて知らなかった。ゆったりと大らかなケーナのひびき。それは、どこまでも果てしなく広がるアンデスの空の青さに吸い込まれていくかのようだ。白く険しい山嶺。その間を縫うように、大きな翼を広げ、自由に、ゆっくりと漂うコンドルの姿。行ったこともないその地の風景が目に浮かんでくるほど、ロス・アウキスの演奏は情感に満ちた素晴しいものだった。この曲に込められた、人々の思いや、憧れが、熱く心にひびいてくるようだった。

さて、10分の休憩後、第2部はとても原始的な雰囲気の曲からスタートだ。ステージ奥の木々は、すっかり黒いシルエットになっている。風も出てきた。梢が揺れる。

見慣れたはずの風景も、ちょっと目を凝らしてみると、自然がいっぱい、ふしぎがいっぱい！

合歓の木に飛び交う蝶。草木染めやリース作りによく使うというヤシャブシの実。

もう何度となくこの場所を通っているというのに、そう教えられて、初めて気付いて、びっくりして、感動して、同じ景色の中にいるというのに、目に映るものが、人によってこんなに違うんだということにも、ちょっと驚いたりもして。

今回の「風の谷を知ろう」のゲストは、原始技術史研究家の田中稔さん。田中さんの目は、緑の中の虫をいちはやく発見できて、その手は素早くそっと蝶をつかまえ、その耳は小鳥の声を聞きわけ、もう身体全部が、自然の中に溶け込んでるって感じがした。たぶんそのことを一番感じていたのは子どもたちではなかったかなと思う。その証拠に、田中さんの周りは子どもたちがいっぱいだった。田中さんのそばにいれば、なにか面白いものを見つけてくれる、なにか知なかったことを教えてくれる、子どもたちにはそれがわかっていたのだろう。

やっぱり、こんな自然の中では、蝶をつかまえられたり、虫を発見できたりする人が、ヒーローになれるのだということを実感。

なにか楽しい発見ありましたか？

TÉRRA CLUB LIVING THINGS
風の谷の生き物図かん

たぶんシジミチョウの仲間
ムラサキシジミかな？
とも思うけど･･･。
羽を開いたときに
きれいなブルーが見えた。

羽化したばかりのチョウ
たった今、さなぎから出てきたばかりのチョウ。
生まれたては、羽もどこか緑っぽくて、濡れた感じが残ってる。

ワラジムシとダンゴムシ
左がワラジムシ、右がダンゴムシ。
丸まってしまうのがダンゴムシ。
でも2匹は仲間。

ヤシャブシ
大東学園グラウンド沿いに生えている。
実は、草木染めやリースに使う。
どんな色に染まるのかな。

ヒルガオ
日当りのいい場所に生えている。
ピンクの花が、可憐。
茎は細いつるで、左巻き。

ネムノキ
紅色のふわふわとした花が咲く。
花は夕方開き、葉は、夕方閉じる。
蝶はこの木が好きだとか。

ツユクサ
風の谷周辺の道端いたるところで見られる。
小さな紫色の花がなんともかわいい。
花は、1日でしおれてしまう。

アゲハの幼虫
これがアゲハになるなんて、
ちょっと信じられない。
サンショウの葉っぱの上にいた。

レタス
これは、幼稚園の庭になっていた。
ほかに、トマトもピーマンもなっている。
実のなる木もいっぱい植えてある。

3

TÉRRA CLUB REPORT
レポート

ただの竹から楽器ができる。しかもちゃんと音が出る。しかもちゃんと自分でつくった。なんだかすごく感激してしまった。

自然とどう付き合っていくかは、人によっていろいろだ。その中でも、自然の素材を使って、自分の手で何かを作り出すというのは、かなりいい感じの付き合い方ではないかと思う。なによりも、つくったものが形になって残るっていうのがうれしいし、たとえばそのつくったものを使って、遊んだり楽しめたりするのがまたいい。

というわけで、今回の竹笛作りへの期待度は大。

そして、当然、材料の竹を調達するところからはじめるのが「てら子屋」流。「この時期の竹は、水分を多く含んでいて柔らかいので、細工はしやすいけれど、笛作りにはあまり適しません。青青としたきれいな竹よりも、ちょっとすすけた感じのがおすすめです」と、田中さんのアドバイスを受け、各自セレクト。例の、トトロのトンネルの中を、つっかえながらも切り出した竹をなんとか運び出し、早速作業開始。

見本を見て、どんどんはじめるお父さんたち。確かに、見本のどの笛も、作りはいたってシンプルで、見るからに簡単そう。田中さんのデモンストレーションでも、あっという間に完成して、とてもいい音色を響かせていた。「なんだ、簡単そう」と、きっと誰もがそう思いましたよね。

わが家でも、娘は小さめのウグイス笛、私は小さめの横笛を作ることにしてスタート。しかしはじめて数分で、娘がノコギリで指にけが。結局、ウグイス笛から作りはじめることに…。

工程はいたって簡単。適当な長さに切った竹の、穴をあける部分をカッターで薄く削り、キリで穴をあけ、さらにその穴を広げ、吹き口用の細めの竹を斜めに切って、あけた穴にあわせて、吹いてみるといい音が鳴って…?、ん? 音がでない、えーっ、どーして? 田中さんのは、すぐにいい音が出たのに? 穴を大きくしたり、角度をかえたり、試行錯誤の結果、ピーッ、フィーッ、とかすかに音が。「やったー」と思わず叫んでしまったのは、娘ではなく、この私。周りを見回すと、なんてことはない、夢中になっているのは大人ばかり。

それにしても、とてもうれしいものだ、自分の作ったものがちゃんと音が出るのって。というか、こんな簡単な素材と簡単な手順で楽器が作れたということに、ひどく感激してしまった。

虫に刺され、ノコギリやカッターでけがをしても、なにかを作り上げる喜びにみちみちた2時間だった。

みなさん、結構近所で自慢したりしてるんじゃないかなあ。

ちなみにわが家の娘は、学校に持って行って発表して（もちろん自分で作ったといって）、私は、夏休みのキャンプに、カッターとボンドを持って行って、その場で笛を作ってみんなを驚かしちゃおうかなあ、なんてことを計画中です。

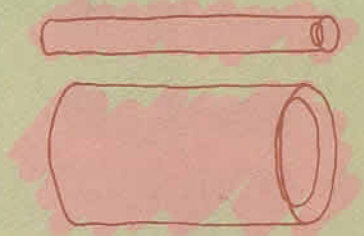
TÉRRA CLUB
LET'S TRY
やってみよう！

かんたん竹笛の作り方

穴の押さえ方や、吹き方、竹の太さでも、
音が違うのが竹笛の面白いところ。
いろいろな竹笛があるけれど、たぶん作り方と
音の出しやすさでは、このウグイス笛が一番簡単。
太いので作れば、カッコウやブッポウソウ、
細くしていくと雀などの小鳥のさえずりの
音も出せるよ。あとは、吹き方の修行あるのみ。

材料；竹、カッター、ボンド、
ノコギリ、キリ

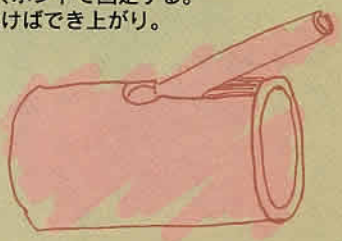
1、太めの竹と、細めの竹を同じくらいの長さ用意する。
節がないように。竹が太ければ低い音の笛、
細ければ高い音の笛ができる。



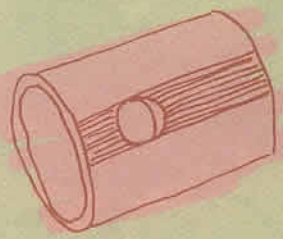
2、太いほうの竹の穴をあけるところを、
カッターで削って、薄くしておく。
薄くしたところのほぼ真ん中に、穴をあける。
はじめはキリであけて、そのあとカッターで
穴を広げていくのがやりやすい。

3、細い竹の先端を、斜めにカットする。

4、太い竹の両端を手でふさぎ、吹き口用の細い竹を、
穴の近くでずらしながら吹いてみる。
いい音が出たところが、ベストポジション。
その位置で、ボンドで固定する。
ボンドが乾けばでき上がり。

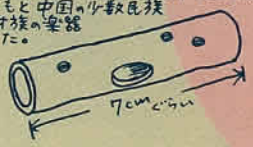


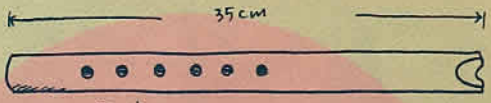
竹で作る楽器あれこれ



口笛（コウデイ）

細い竹筒の両端を親指でふさぎ
中央の穴から吹く手のひらサイズの小さい笛。
もともと中国の少数民族
ミャオ族の楽器
だった。



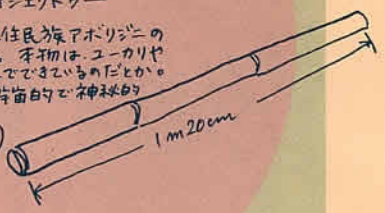


ケーナ

ご存知南米アンデスのフォルクローレに使われる笛。
指穴は表に6つ、裏に1つ。
ドレミファソラシドの他、指を半分ひらいたりして、
半音なども自由に出せる。
このシンプルな笛で、ものすごい表現がいろいろできる。

ディジェリドゥー

オーストラリアの先住民族アボリジニの
神聖な楽具。本物は、ユーカリや
マングローブの木でできているのだとか。
音は……とても牧歌的で神秘的
らしい。
（ちょっと想像が
つきません!!）



※ 参考文献
関根秀樹「ケケでつくる楽器」（創和出版）
他にもいろんなケケでつくる楽器の
話がのっていて、おもしろいですよ。
子どもが、学校の図書館からかりてきて
くれました。

4

TÉRRA CLUB REPORT レポート

落ちていた小枝が、虫になったり、フォトフレームになったり。これぞ、自然と人間のイマジネーションの合体パワーだ！

当然今回も、まずは材料調達へいざ出発。

面白そうな形の枝や、長い蔓、木の実や、葉っぱや、これ使えそう！　って感じのものを中心に、みんなもう慣れたものです。基本は、落ちてるもの。腐ってたりするのはアウトだ。細いのはあそこで、この枝分れしてるところはあんな風に使って、と不思議なもので、ただの落ちている小枝なのに、見ているだけで、いろいろイメージが湧いてくる。(あとになってわかったのですが、イメージはあくまでもイメージでした)

さて、たくさんの材料を前に、我が家は、田中さんの見本にあった昆虫を作ろうと、意気込んでは見たものの、実は、集めてきた木がなんだか腐ってて、中がぼろぼろだったのです。切っても切っても、虫の胴体になってくれそうなところがない。仕方ない、ということで、急に予定を変更し、生き残ってた小枝を組み合わせて、フレームを作ることに。娘はといえば、マイペースで、木の板に小枝や木の実、麻紐やおしろいばなの種まで使って、狐を制作中。フレームも、見ためは簡単そうだけれど、枝を組み合わせたり、固定させるのが、結構大変でした。

「春先の枝で作って家の中に置いておくと、その木から芽が吹いたり葉っぱが出たりして、それもとっても素敵なのよ」と教えてくれたのは田中さんの奥さん。そんなたのしみ方もあるんですねー。「でも家はこれからの季節とっても大変なのよ。木の実や、じゅず玉や、いろんなものの収穫の季節だから。それで家の中がいっぱいになっちゃうくらい」うーん、確かにそれは大変かもしれない。なんて話をしながら、ああでもない、こうでもないなんてやっているうちに、なんとかできあがり。そして発表会。

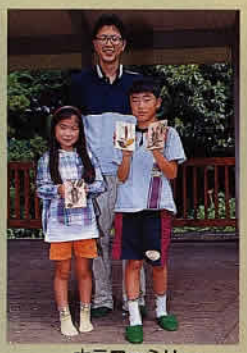
皆さんのこだわりと、オリジナリティーと、確かな技術に、びっくりしました。うまい！　とくに、おとうさんパワーっていうんでしょうか、なんだか、どのおとうさんもかっこよく見えました。1本の枝が、見事に変身してるではありませんか。我が家が得た教訓は、材料選びは慎重に、あきらめないで、素材を活かすためのイマジネーションを大切に……。

それにしても、田中さんの作品の数々には、いつも感動してしまう。自然を感じる心がいっぱいだから、自然もそれに応えてくれる……。そんなことをふと思ったりしました。

TÉRRA CLUB FAMILY
こんなのできたよ！

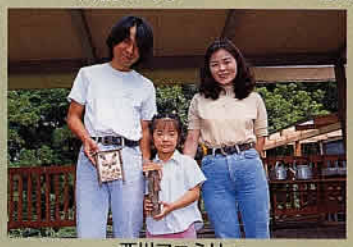
アイディアいっぱい、なかなか完成度の高かった作品発表会。

岩月ファミリー


木元ファミリー

藤村ファミリー

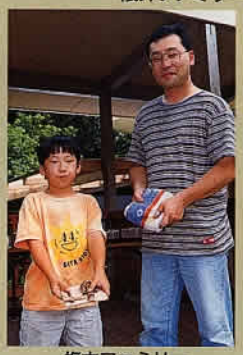
島津ファミリー

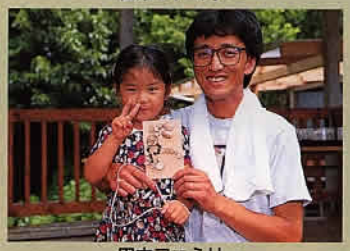

西川ファミリー

隈井ファミリー

笹原ファミリー

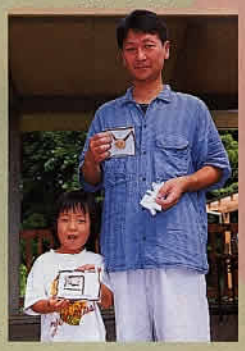
川出ファミリー


梅本ファミリー


田中ファミリー

小山ファミリー

箕浦ファミリー


昆野ファミリー

LET'S TRY
作ってみよう
「木の昆虫」

1. まず虫の胴体になるような枝を探す。適当な長さに切ったら、さらに、たて半分に切断する。薪割の要領で、ナイフを枝の断面にあて、太めの枝でナイフをたたくと、簡単に割れる。

2. 半分になった枝を、ナイフで細工する。虫の胴体のまるい感じや、羽、頭との境目などもナイフで切り込みを入れてつくる。

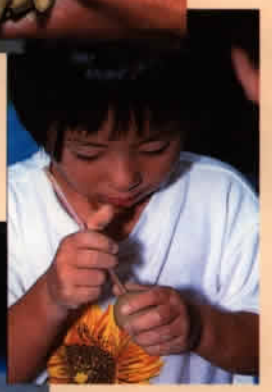
3. 足や、あご、などは、胴体に穴をあけ枝を差し込む。そこを接着剤で固定する。接着剤が乾くまで、そのままにしておく。

4. 標本のように、木箱にいれると、さらに臨場感が増す。

5

TÉRRA CLUB REPORT
レポート

指先に土のぬくもりを感じながらイメージを膨らませる。シンプルだけれど、心豊かな時間が過ぎていった。しばし、縄文時代へタイムスリップだ。



今、主婦の間で陶芸がブームになっている。街の陶芸教室も、カルチャーセンターでも、主婦でいっぱい。それを否定するわけではないけれど、もっと素朴な、例えば、南ヨーロッパあたりの人々が日常で使っているような、そんな器を作れないものかと、秘かに思っていた。ポテッと厚味があって、植木鉢のような風合いで…。そんな時、雑誌で「縄文土器を作ろう」(タイトルは正確ではありません)というのを見て、「これだ!」と思ったわけで。で、実は、その特集は、何をかくそう(別にかくさなくてもいいのですが)あの田中さんが指南役で登場していて、今回は、まさに待望のワークショップだったのだ。

いつもながら、田中さんの作品は、本当に素敵で、またまた、「よーし、こんなの作るぞ」と意気込んでしまうのだが、果たして今回の出来はどうなることやら。使う粘土は、「野焼き用」の粘土で、これはハンズなどでも手に入る。それぞれの家族がそれぞれの位置で、製作開始。いつもと違って、小さな子供も、静かに熱中しているのが印象的。やはり、今までの木や、竹などの材料と違って、指先一つでどうにでもなるのがいいのだろう。一応作りたい形になってくれるのがいい。失敗しても、何度でもやりなおせるのがいい。そして、なんだかちょこちょこ出来上がっていくのがまた楽しい。

というわけで、どの家庭もかなりいろんなものができたのではないかと思う。ちなみにわが家では、小さな入れ物を3つ(梅干し入れと、バターをのせる皿と、砂糖入れ)、娘は、ちょっと重たそうなペンダントトップ、残った粘土をクルクルと丸めてペタっと潰して作った箸置きを来客分も入れて5個、となんだか所帯じみた作品の数々。

これらをしばらく乾かして、そして、いよいよ野焼き! みんなの作品が、割れずにきれいに焼き上がるのを祈りましょう!

ちなみに田中さんの作品できれいなテラコッタ色をしていたのは、ガス釜や、電気(オーブントースターでも焼けるそうです)で焼いたもの。たき火で焼くと、木の種類や炎の勢い、すすがついたりの具合で、なんとも微妙な色合いになるそうだ。どんなふうに仕上がるのか、それも楽しみ。

「縄文という時代」

原始時代の生活技術を研究、体験する、というと、「それでは大地震が起きても平気ですね」などと良く言われる。しかし、いわゆる縄文時代の生活と、現代の生活で良く考えられがちなサバイバルとは、意味が違っている。

例えば縄文人は、日々の暮らしを少なくとも1年以上の単位で考え、どの季節には何をするか、食料はどうするかなどをきちんと考えていた。ただ何も考えずに、目の前の物だけを手にしてその日暮らしをしていたわけではない。だから厳しい冬も乗り越えられたのである。それにくらべ現代は確かに便利で、食べ物にしても生活用品にしても欲しいと思った時にすぐ手に入る。しかしそれはすべて自分のための貯えというわけではないので、いざという時にどうなるかは分からない。人工のわりには少ないであろう食料や生活必需品は、当然のように取り合いになりすぐに欠乏するのは目に見えている。もしかしたら現代人は縄文人より災害には弱いかも知れない。

食料だけでなくモノや設備に頼り切っていることも問題であろう。

人間は生活の中にいろいろなモノを増やし、あらゆる要求を満たそうとしてきた。道具一つとっても、例えば野菜を調理するのにも、皮を剥くのは皮剥き器、切るのには包丁、他にもスライサー、スピードカッターなど、包丁一本で済むはずなのにそれぞれ道具を使い分けたりする。それはある意味で技術の進歩なのかも知れないのだが、それだけ不器用になり、身の回りにモノが増え、逆にモノがないと何もできない人が増えてしまった。またライフラインと呼ばれる電気、ガス、水道皿に今では電話、ファクシミリ、インターネットなどの通信設備さえも一般の人々に欠かせなくなっているほどだ。便利、安全、楽しい、などは慣れてしまうとあたりまえのことになってしまう。

便利になれば他のやることが増えるし、安全に慣れれば危険に対して鈍くなる。一時的な楽しさに慣れてしまうと感動も減ってしまうし、より強い刺激を求めるようになる。シンプルな暮らしをしていた縄文時代。現代と比較するのもいいが、考える時には、ただ数字に表わせるものだけではすまないであろう。より広く深い味方が必要なのだ。

『縄文土器のことを、ちょっと』

火焔土器（田中さんの作品）
彫刻的な土器。日常生活の道具ではなく、祭りなどのために使われたらしい。

日本では、焼く12,000年前からすでに土器を作ることを始めていた。形のない粘土をこねて、形を作り、火で焼き上げて、固形の容器にかえてしまう。これは、人類がはじめて発明した科学変化の一つである。土器の発明によって、人類ははじめて、食べ物を貯え、1カ所に定住するようになり、集落を作り、文化が急速に発達していったと考えられている。縄文土器は、日本で一番最初に作られた土器。表面にナワめの模様を持つのが特徴。粘土のひもなどを張り付けた立体的な文様もあり、当時の狩猟文化を反映し、どちらかというと豪壮で男性的である。粗い粘土や砂を材料とし、厚みがあり、釜はなかったのでたき火で800～950度で焼かれていた。燃え上がる炎を思わせる飾りの施された火焔土器、そこの尖った大形の深鉢の尖底土器、筒形の円筒土器などがある。文様は、縄で付けたり、竹の切り口を使ったり、丸い棒にくぼみを作ったものを転がして連続模様を付けたりしている。

風が強くて火事になるんじゃないかという心配の前に、火おこしの大変さを体で実感。どろどろで何が入ってるの？という不安をよそに、縄文粥は、あっという間に売り切れました。

すっかり乾いた土器をいよいよ野焼きで焼く日がやってきた。もちろん、たきぎ拾いから始まって、まずは今回のメインイベント、火おこしに挑戦。キリモミ式といって、棒と板による一番シンプルな方法で、師匠の田中さんは、自他共に認める「火おこし名人／キリモミ式発火5秒」という達人。（正直いって、初めはそれがどんなにすごいことなのか分かっていなかった。後で、なるほど…と思い知らされたわけなのですが）それぞれがペアで組んで、火おこしキットを使っての挑戦。火をおこすといっても、最初はほんとに、まさしく火種。それを、麻などの繊維で作ったわたのようなものにくるんで息を吹きかけると、ポワッと炎があがった。縄文の炎が蘇った一瞬！

と、いいたいところですが、ここまでくるのが予想以上に、大変で、時間がかかったわけで…。キットは、ヒモギリ式発火法でひもを使って火きり棒を回転させる方法。棒を押さえる人、ひもを回転させる人、と2人のチームワークがものをいうわけで、どちらが強すぎてもうまくいかなくて、もしかしたら、縄文人に生まれなくて良かった、少なくとも縄文時代にこのパートナーでなくて良かったなんて思った人もいたかも??

小さな火種を焚きつけ（枯れ草や枯れ葉など）にうつし、順に太い薪へと燃え移らせて大きくしていく。

ところでどんな木が薪に適しているかというと、スギやマツ、ヒノキなどの針葉樹は良く燃えるけど煙りやススも多く、クヌギ、ナラ、カシなどの広葉樹は高熱を発してゆっくり燃え、長持ちする。つまり、焚きはじめは針葉樹で、炎が安定してきたら広葉樹というのが理想的なんだそうだ。最近では、キャンプ場でも焚き火禁止のところが多くて、確かにマナーの悪さを目のあたりにすると仕方ないかなーとは思うものの、すごく残念だ。安全で、カッコイイ焚き火の技術は、子どもたちに伝えたい人間の財産だとも思うのだけれど。

さて、土器を焼いている焚き火を使っての竹パ

「縄文コラム」

★美味しい木の実はどれだ！

縄文人の食料として一番大切だったのが木のみ。クリ、クルミ、シイ、ブナ、ハシバミなどは苦みがないので灰汁抜きをしなくてもそのまま食べられた。一家5人が3週間ほど集中して木の実拾いをすれば10カ月分の食料をまかなうことができたという。クルミはすりつぶして、調味料としても使用、ブナやシイ、ハシバミは子どもたちのおやつとして大人気だった。

★雑穀を美味しく食べる法

一番簡単なのは、御飯を焚く時にお米の1割ほどの雑穀を入れ、そのまま焚いてしまう。風味が増してなかなか美味しいです。ちなみにわが家では、7分づきのお米に、2～3種類の雑穀を入れて焚いてしまいます。もちろんお弁当の御飯もこれ。冷めてもまずくありません。

「お砂糖なし！ヒエとカボチャのホット・ケーキ」

（材料・12枚分）

ひえ・1カップ、水・2カップ、カボチャ・500g、小麦粉・2／3カップ、塩・大さじ1、米飴かドライフルーツ

（作り方）1、ヒエは洗ってざるにあけておく　2、厚手の鍋にヒエの2倍の水を沸騰させ、ヒエとカボチャと塩を入れ、よくかき混ぜながら水気がなくなるまで煮る。煮えたら弱火にしてふたをして15～20分焚く。その後、火からおろし、10分蒸らす。　3、ボールに移してヒエが熱いうちによくつぶし、小麦粉を入れ手でよく混ぜ合わせ10インチぐらいのホット・ケーキ形に作る。4、中火でゆっくり両面焼く　5、米飴、ドライフルーツで作ったジャムを添える

6

TÉRRA CLUB REPORT レポート

ンも大好評。火の中に落として真っ黒になっちゃったり、生焼けのままパクついちゃったりといろいろあったけれど、火を囲んでの時間というのは、なんだか心和むものなんですね。

そして、メインディッシュの縄文粥の登場。サイドディッシュは、赤米という稲の原形といわれているお米を焚いたもの。お粥には、アワ、ヒエ、などの雑穀に椎茸やトリ肉や干した貝ヒモなどの入った豪華版。どろどろ、そして、沸々ととろけるようなお粥を、竹の器に入れて。ハフハフいいながら、じんわりと優しく体にしみ込むような味わいは格別。子どもたちに、ちょっとぼろぼろとした赤米が人気だったのには驚かされた。確かに噛みしめると、香ばしくってなかなかいける。こういうものを美味しいと思える感覚があるのだから、やっぱりきちんとしたものを食べさせてやらなければ…と、母は、反省。

この5回のワークショップで体験したたくさんの事。手を使って、足を使って、頭を使って、なんだか子どもの事も忘れる位に夢中になって。楽しかったから、子どもたちにもちゃんと伝えてやりたい。お粥をおかわりする子どもたちの姿を見ながらそんなことを考えていた。

●野焼きの手順

1. 陰干ししていた土器を天日乾燥させる。
2. まず、火から60cmくらい離して土器を並べ、時々向きをかえ全体を暖める。
3. 向きを変えながら火から30cmまで近づけ、白っぽくなったら20cmまで近づける。
4. おき火をならし、土器をまん中に集める。
5. 器から40cm離して周囲に薪を並べ火を焚く。土器の色が変化してきたら、だんだん火を強くする。
6. 30分したら、たき火をドーム状に積み上げる。しばらく燃やすと土器が赤くなり、透き通った感じになる。
7. ひっくり返しながら全体を焼き切る。
8. 薪が燃え尽きるのを待ち、冷めるのを待つ。
9. 完成。カンカンと鋭い金属音がすれば大成功。（「縄文生活図鑑」関根秀樹著／創和出版より）

実際は、縄文人たちがこの手順でやっていたという野焼きの定説はまだないので、いろいろなやり方があるそうなのだが、小さなものならキャンプのたき火で十分楽しめそうだ、ということを実感できたのは大収穫。（後日談・・・黒っぽいのを家に戻ってガス台で焼いたら、時間はかかったけれど、けっこうきれいなテラッコタ色になって嬉しかったです）

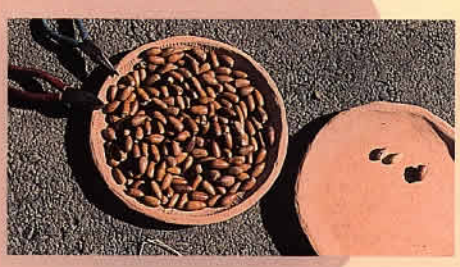
★縄文人ってどんな顔してた？

縄文人は二重まぶたで、目はぱっちり、ほりの深い顔立をしていた。丸顔に、えらのはったあご、歯並びの良い小さな歯も特徴だ。鼻も大きく、額は狭く、ひげは濃い。手はしっかりと大きく、肉厚で、指はすらりと長かったという。成人男子の平均身長が158㎝、女子は148㎝、なで肩の筋肉質で手足はすらりと引き締まって長かったとか。なんだか、だれかに似ている気がしませんか？

★縄文人の食べ物は？

縄文人は、決して行き当たりばったりのその日暮らしをしていたわけではなく、風や雲などで天気を読み、月や星、木や花、鳥や虫を指標としたカレンダーを持っていた。そしてそのカレンダーに即して、食物戦略や作業計画をたてていたという。木の実や野草、魚や海藻、キノコ、トリ、動物、昆虫類も食べていた。保存や加工の方法にも熟知していたようだ。例えば山形県高畠町押出遺跡で発見された縄文クッキーは、クリやクルミの粉にエゴマ、シカ肉、血、骨髄を加え、野鳥の卵で練って焼いたものだという。各種ビタミンを含みミネラルも豊富、栄養ぱっちりのクッキーだったそうだ。

★縄文クッキーを作ってみよう



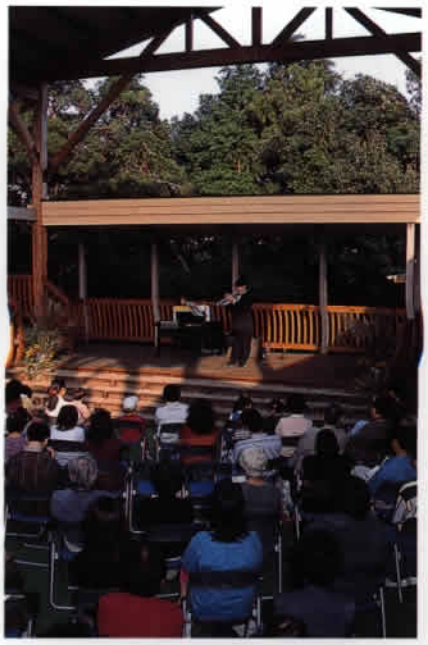
〈材料〉ドングリ粉かトチ粉（なければソバ粉、キビ粉でもいい）、クリ、クルミ、エゴマ、干しブドウ、ハチミツ、天塩、卵

〈作り方〉クリ、クルミは細かくし、エゴマは軽くいってすりつぶす。材料を混ぜ合わせ、ちぎって丸めて、焼く。

素朴な味が楽しめるおやつになります。

「てら子屋コンサート」は、本物の音を、身近に楽しむための小さなコンサートです。いろいろな生の音を、老若男女だれもが楽しめる場づくりを心がけました。世界中には、その土地ごとに暮らしに根付いた音楽があります。世界の人たちを、楽しく音から知るのもおもしろいものです。また、そういうジャンルの音楽には、日頃なかなかふれるチャンスが少ないです。てら子屋コンサートでは、ジャンルにこだわらず、積極的に世界の音を取り入れてみました。

第1回目は、日本にいる私たちにとって、ちょうど地球の裏側のペルーの音楽をペルーの人に演奏してもらいました。楽しくなり、しまいには会場のみなさんと踊りだしてしまうコンサートでした。地球の反対側にいる人たちの音楽も、とても気持ちよく、とても心をうつ音色だったことに改めて気が付いた人たちでいっぱいでした。(P.16参照)



秋風、爽やか、トランペット

10月25日

第2回は、コンサートにはもってこいの秋の一日、おじいさんもおばあさんも、お父さんもお母さんも、大きな子も小さな子も、風の谷に集まってトランペットで心を弾ませました。大人っていうのは、けっこう何でも知っているふりをしていますよね。「トランペットって、なんで音が出るのだろう?」などと、ほとんどの人は疑問を持ちません。そういう疑問は、「大人げない」からです。しかし、「金物屋さんで買ってきた、真鍮のじょうごと、ビニールホースで、トランペットの音は出るでしょうか?」とクイズを出すと、正解がわからなくなる人がけっこうたくさんいるわけです。

いつまでも、好奇心を忘れないってことは大事ですよね。2回目のコンサートでは、本物のじょうごとビニールホースを使って、プロのトランペット演奏家が吹いて実験してみました。会場のお父さんや子どもたちまで吹いてみました。さて、結果はどうだったでしょう?

『トランペット』っていうのは…

トランペットは、皆さんよくご存じの、金管楽器の代表的な楽器です。「トランペット」という名前は、ギリシャ語の貝殻の一種を表す言葉に源があると言われています。山伏の使うホラ貝などは貝殻で音を出していますね。他にも木、竹、樹皮などを材料とした筒型の楽器は、日本、そして世界各地に広く分布しています。

皆さんは、そんな楽器を「らっぱ」と呼ぶこともあるでしょう。「らっぱ」の語源は、サンスクリット語のrava（叫ぶ）ではないかと言われているそうです。日本に楽器らっぱが伝えられたのは、江戸時代幕末にイギリスやフランスの軍隊の情報の一部として入ってきたようです。「ほらを吹く」ことを、「らっぱを吹く」ということもあるようですね。

現在、一般的にいうトランペットは、13世紀以降イスラム圏から、ヨーロッパに伝来したナフィールという楽器がもとになっています。そして、いろいろな工夫を重ねた結果、19世紀に今の楽器のようなバルブ付きのものが登場しました。今、普通のトランペットには、3つのバルブが付けられていて、管の長さを段階的に変えられるようになっています。

TÉRRA CLUB CONCERT
コンサート

アジアの民族音楽を奏でる主な楽器…シタール

「シタール」は、北インドの代表的な弦楽器で、中世の宮廷音楽の中の花形楽器です。現代では、古典音楽のみならず、ポピュラー音楽や映画音楽にもよく使われています。ビートルズのジョージ・ハリスンが弾いていたので有名ですね。あの独特の幻想的な音色は、演奏 弦と平行にフレットの下に張られた共鳴弦が奏でるハーモニーにあるのです。

タブラ

北インドの2個1組の片面の太鼓です。インドだけでなく、バングラディシュ、スリランカ、パキスタン、アフガニスタン、そしてアフリカのタンザニアでも使われている重要な打楽器です。シタールなどの旋律楽器と共に使われますが、舞踊、声楽、最近では映画音楽にまで使われています。

時が熟した、インドの音色

12月6日

第3回は、アジアの音楽でした。私たち日本人は、アジアの風土のもとに暮らす民です。しかし、それを忘れてしまっていたり、忘れようとしていたりということが、暮らしのそこここに見られるような気がしてなりません。また、私たちは、心の中で、その時どきの自分に合った時を刻む時計を持っているはずなのに、機械時計の刻む正確な時間だけで、刻一刻を争うような毎日の暮らしを営んでいるようなところもあります。

3回目のコンサートでは、そんな皆さんの心の時計をあらためて感じてもらおうと、悠久の時を重ねて暮らしの中で培われてきた、私たちが暮らすモンスーンアジアを中心とした伝統的な音色を味わいました。インドを中心にして、古い歴史のある楽器を使って本物の音を聴いてみるとともに、一年の最後のコンサートは、幼稚園や学校の子どもたちも参加する楽しいプログラム。おじいちゃんやおばあちゃんの昔懐かしいメロディーのルーツを、アジアの民謡に探るプログラムなど、家族みんなで楽しめるものとなり、師走でだれもが忙しい時期に、自分の時間の大切さを、ゆっくりジワっと味わえるものとなりました。

COMMENT

てら子屋フォーラム、てら子屋コンサートともに、回を重ねる毎に、
お馴染みの顔が生まれ、新しい顔が少しずつ加わり、輪を大きくしてきました。
ご近所のみなさんにも気軽に足を運んでいただきました。
だいぶ遠くからご家族連れで足を運んでいただきました。
来ていただいた皆さんの笑顔、真剣な眼差しに支えられて、初めての年の「てら子屋」は幕を閉じました。
みなさまからいただいた声、ほんとうにありがとうございました。

フォーラム参加者コメント

【第１回フォーラム】

★ 76歳になってオリンピックの金メダルを胸にかけられるとは思いもしませんでした。ほんとうに素晴らしいお話でした。

★ 小学校に勤めています。手話指導や老人ホームへの訪問の際、「特別なことではないんですよ」と子どもたちに言うこと自体、抵抗がありました。メガネのように普通の感じで、ともに生きる仲間であることを改めて感じさせられました。松江さんの正直なお話から、子どもたちへの対応の方向が見えてきたような気がしました。

★ 私のクラスにも障害を持った子が２人います。だから、障害者に対する抵抗はあまりないんだけど、ともに生きるという意味で、小さい頃から同じ環境でいっしょに自然に暮らすことが一番人間らしいことなんだなということを改めて感じました。

★ ノルウェーの人たちにとっての日常は、私たち日本人にとってまだまだ非日常なんだと思います。だけど、今日の話を聞いて、私にとっての非日常が、一歩日常に近づきました。とにかく、街で声をかけてみます。

【第２回フォーラム】

★ 「日本人は世界一ひ弱になっている」という言葉が印象的だった。より快適で健康的な生活を求めて、経済大国に発展してきたはずなのに、次の世代に負の遺産を残してしまうという矛盾を認識させられました。

★ 清潔であることは良いことだと思って生きてきた私にとって、先生のお話は最初抵抗がありました。だけど、聞いているうちにだんだん自分の価値観がくつがえされてきた感じがありました。

★ いろんなバッシングにもめげず、使命感に燃えている先生の姿に感激しました。いきすぎた清潔志向に歯止めをかけるために頑張って下さい。

【第３回フォーラム】

★ いわゆる文明生活の中で、どこを切っても同じ顔をした機械の作ったバームクーヘンのような人間ではなく、今日の手作りバームクーヘンのように、個性豊かな人生でありたいなと思いました。

★「世界の常識から言えば、木は、家や紙の原料というより、燃料なんです」という言葉が印象的でした。こういう常識を知らないうちに私はたくさん身につけてしまっているのだろうなと感じました。

★ アルプホルンやアコーディオンによる演奏、とても素晴らしくウキウキしてしまいました。

コンサート参加者コメント

【第１回コンサート】

★ 家族全員、祖父母まで楽しめました。一番下の子までぐずることなく、手拍子をとったり、踊ったりと歓んでいるのを見て、親の私が驚きました。

★ ステージ背景の緑と、透き通った音色、鳥のさえずりまで聞こえ、とても印象に残るコンサートだった。

★ 初めてペルーの楽器の演奏を間近で聴きました。息づかいまで聞こえてくるような、人間くささを感じました。

★ 夜の屋外ステージは、雨の後の森の香りと風が気持ちよかった。音楽と会場の雰囲気が相まって、なんだか高原に来てコンサートを聴いているようだった。

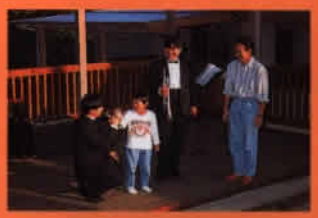
【第２回コンサート】

★ トランペットの説明が、大人にも子どもにもおもしろく、わかりやすかったようだ。子どもが、とてもトランペットに興味を持っていた。トランペットは、ほんとうに「秋空の音」なんだなと思った。

★ メチャ楽しかった。またやってほしい。

★ 小さな子どもたちまでが、演奏中静かに聴いて、リズムをとりながら聴いているほどでビックリしました。年甲斐もなく、若い頃の気持ちに戻りました。

★ 子どもが小さいので、生の楽器の演奏が近所で親子で聴けるなんて、とてもありがたいです。



★ トランペットのしくみ、初めて知りました。秋風に包まれての音楽会、とても気持ちが良かったです。

【第３回コンサート】

★ アジアの民族楽器のエキゾチックな音色に感動した。ぜひ、楽しいトークとともにもう一度聴きたい。

★ 歌、お話、音色のすばらしさで、寒さもなんのその。体も心もあったかくなりました。

★ 普段、聴くこと、見ること、触れることのできない世界各地の民族楽器と音楽のシリーズを、ぜひ続けて下さい。

★ たぶん、このコンサートに参加しなかったら、一生出会うことのなかっただろう音楽のすばらしさに触れた感じです。